

20世紀アジアの社会変動と産育のネットワーク —5地域ライフコース調査から—

山根 真理* 洪 上旭** 朴 京淑***
李 東輝**** 長坂 格***** 中筋 由紀子*****

*家政教育講座

**嶺南大学

***ソウル大学

****大連外国語大学

*****広島大学

*****地域社会システム

Social Change in 20th Century's Asia and Childbirth/Child Care Networks —Through Life Course Survey in Five Societies—

Mari YAMANE*, Sang Ook HONG**, Keong-Suk PARK***,
Dong Hui LI****, Itaru NAGASAKA***** and Yukiko NAKASUJI*****

*Department of Home Economics Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Yeungnam University

***Seoul National University

****Dalian University of Foreign Languages

*****Hiroshima University

*****Department of Regional and Social Systems, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1 目的

本稿の目的は、2009年にアジア4カ国5地域(日本:名古屋市、韓国:ソウル特別市・テグ広域市、中国・大連市、フィリピン:イロコス地方)で高齢期にある人々を対象に実施したライフコースに関する質問紙調査結果の比較分析を通して、20世紀アジアの社会変動とライフコースの関連を考えることである。¹周知のように、個人の人生の出来事と歴史過程とのかかわりを見る研究は、1970年代のアメリカで登場し、エルダー、ハレーブンの代表的な著作を生み出してきた。(エルダー、1986、ハレーブ、2001)日本でもこの視角は1980年代に定着し、多くの研究蓄積がある。

しかし、アジア諸地域に視野を広げ、人生と歴史的時代のかかわりを包括的にとらえる研究はなされてこなかった。アジア諸社会におけるライフコースの比較研究という点で本研究は、先駆的な研究と言うことができる。また同時に、植民地の経験や「国境」を超えた移動体験を含む20世紀アジアの歴史を、生きられた人生の記憶にもとづいて記録するという点で、この調

査はまさに最後の機会であり、「記録することで歴史的に記憶する」という意義があると考えられる。

ライフコースイベントのなかでも特に、妊娠、出産、子育て、介護など、ケアにかかわる、女性が中心になることが多いライフ・イベントに注目したことが、この研究の特徴である。本稿ではケアにかかわるイベントのうち、「産育」をめぐる社会的ネットワークに着目する。具体的な課題は、調査対象者となった1910年代から1940年代生まれの人々が、生まれ育った時期の産育のネットワークと、自分の子どもを育てた時期の産育のネットワークについて、各地域の調査データを比較考察することである。各地域における産育のネットワークの変容過程を、「基層の家族・親族システム」および歴史的時代との関連で考察する。

2 先行研究と分析課題

(1) 各地域における「ライフコース」視角の研究動向
先行研究を検討するにあたってまず、各地域における「ライフコース」視角の研究動向を概観する。

a) 日本

日本の社会学、特に家族社会学の分野において、ライフコースの視角にたった研究は1980年代に定着し、現在では社会学において一つの確立した地位を得ている。なかでも歴史過程と個人の人生の重なりに強い問題関心をもって行われた調査研究に、森岡・青井らによる静岡調査、安藤による沖縄調査、早稲田大学グループによる一連の調査研究などがある。(森岡・青井、1991、安藤、1998、2000) そのなかで、一地域の調査研究としてみた場合、本報告における名古屋調査はサンプリングやケース数などの点で、量的調査としては不十分な面がある。しかし、アジア諸社会で同時代に生まれた人々のライフコースと比較する先行研究はみられないこと、ケアにかかわる家族イベントに注目したことに本調査の意義と独自性がある。

b) 韓国

韓国においては、ライフコースの視角にたった研究として2000年代以降、重要な実証的研究がなされている。出産、労働過程など、特定のライフ・イベントに焦点をあてた計量的研究(朴他、2007、パク・スミ、2002)や、生活史の聞き取りデータを用いた意味論的考察(パク・キョンスク、2002、ソン・インジュ、2010)など、歴史過程の中のライフ・イベントの変化やその意味にかかわる研究がなされるようになっていく。しかし、ライフコース視角にたった研究は厚い層をなしているとはいえ(ソン・インジュ、2010)、その意味で、アジア諸社会における比較研究というだけでなく、韓国内での地域差をも考察できる点で、本研究は、韓国のライフコース研究に対しても一定の貢献をなしうるものと考えられる。

c) 中国

中国において、ライフコースに関する研究は主として文学の分野で行われてきた。たとえば、周(2003)、趙(2008)など、著名な女性作家の作品とライフコースとのかかわりが中心的な主題である。しかし社会学という視点からの研究調査は今の時点ではとても少ない現状であり、中国においてライフコースに関する研究は始まったばかりと言える。

d) フィリピン

アメリカの心理人類学の影響が強かったフィリピンでは、本研究が焦点を当てるケア、特に育児については、人類学あるいは民族誌的家族研究のなかで、独立後の早い時期から比較的よく論じられてきた。(Nydegger, 1966, Jocano, 1969, Guthrie, 1966など)。しかしケアを、歴史的諸条件に位置づけつつ、さらに階層的差異に留意しながら検討するライフコース研究の視点からの調査研究は、これまであまりなされてこなかった。また、質問紙を用いたライフコース研究の試み自体、フィリピンでの家族研究、ジェンダー研究においてほとんど行われてきていない。今回のフィリ

ピンでの調査は、フィリピンの一地方において実施されたものであり、また調査対象の選定プロセスも必ずしも設計通りに進展したわけではない。しかし質問紙調査に基づき、地方社会の経済・社会・政治の中心である地方の州都の出身者と、地方都市の周辺の農村部それぞれの出身者というフィリピン地方における異なる階層出身者の間での、ケアにかかわる家族イベントなどの比較を可能にする本研究は、フィリピンの家族研究、ジェンダー研究の中でも、方法と視点において独自性を持つといえよう。

以上のように、各調査地域によってライフコース研究の浸透度合いには違いがある。日本と韓国は社会科学の中でライフコース・アプローチが一定程度の定着をみているが、中国とフィリピンでは社会科学的な観点からのライフコース研究はほとんどなされていない。また、ライフコース研究が一定の発展をみている日本と韓国においても、アジア諸社会の歴史的・社会的文脈に位置づけたライフコースの比較研究の例はみられない。その点で、本調査研究には調査方法やケース数の点で限界はあるが、20世紀アジアの歴史的・社会的文脈に関連づけたライフコースの比較研究という点で、先駆的なものと言えることができる。

(2)「基層的家族・親族システム」か、社会・歴史的な文脈か？

出産、育児を含む「ケア」のネットワークについてのアジア諸社会の比較研究は、現代家族を対象にしたものでも、多くはない。数少ない比較研究の一つに、宮坂らが2002年から2004年にかけてアジア5社会(中国、韓国、台湾、シンガポール、タイ)で実施し、日本の状況をあわせて比較考察を行った、「ケア」のネットワークの調査研究がある。この調査結果を用いた一連の研究の中で落合は、「基層的家族・親族システム」との関連で「ケア」ネットワークの構造についての考察を行っている。育児と老親のケア・ネットワークについて落合は、家族・親族システムと関連づけて次のような仮説を提起している。①育児をめぐる親族の相互依存関係は中国系の社会(中国、台湾、シンガポール)において強い。③均分相続の社会(中国、台湾、シンガポール、タイ)では老親のケアは子どもが均等に分担するが、非均分相続の社会(韓国、日本)では特定の子どもに責任が集中する傾向がある。(落合、2008)

他方、「ケア」のネットワークについて社会・歴史的な文脈との関連で考察したアジア諸社会の比較研究は、先行研究の例をみることができないが、単一社会の「社会変動とケア・ネットワーク」にかんする先行研究としては、産業化による核家族孤立説(パーソンズ、1981)、人口学的世代とネットワークの基礎条件に関する議論(落合、2004)など、家族変動論のなかで蓄積があり、命題化がはかられてきている。本稿の間

題意識に引き寄せてみると、中国の3都市比較調査にもとづいて、子育てネットワークを社会・歴史的文脈に位置づけて説明を試みた研究として、鄭の論考が興味深い知見を報告している。鄭は、成都市、ハルビン市、上海市において親族ネットワークの比較調査を行い、国家政策の違いによって親族ネットワーク構造が異なることを指摘し、親族の親密な関係が現在も中国都市部で続いているのは「土地に定住する小農経営、先祖の祭祀、家父長制」によるものではなく、社会主義国家形成以降の国家政策が直接的、間接的に作用した結果によるもの、としている。一社会について論じたものであるが、基層的社会システムからの連続性によって現代のケア・ネットワークを説明する見方を批判し、ケア・ネットワークの社会・歴史的文脈に着目した研究として注目される。(鄭、2002)

「基層的家族・親族システム」と社会的・歴史的文脈に関する本稿の立場は、両者の混合としてケア・ネットワークをみる立場である。近代化以前に各地域に存在した、あるいは生成した「家族・親族システム」が近代化以降にも維持・存続されてきた面は、確かにある。中国の父系合同家族制、朝鮮半島の父系直系家族制、単独継承、親同居だが血統による系譜の観念の弱い日本の「家」、双方的で「ルース」な東南アジアの家族・親族のあり方は、現在でもなお、それぞれの地域の家族・親族の特徴の、ひとつの側面であり、本稿はその点を否定するものではない。しかし他方で本稿は、「基層的家族・親族システム」もまた、それぞれの社会の歴史的、社会階層的な文脈のなかで生成してきたものであるし、近現代の歴史のなかで、政治、経済的状況の影響を受け、階層的な特性を持ちながら維持されたり、強化／弱体化される、歴史・社会文脈的なものである、との仮定をもつ。それぞれの社会の「基層的家族・親族システム」とみなされるものが、歴史的時代の中で、ケア・ネットワークの構造の中にどのように姿を現すのか、あるいは現さないのか。その点に注目して産育ネットワークの変化の比較考察を行いたい。

調査対象者の人々の「生まれ育った時期」は、ほぼ1920-40年代、「自分の子どもを生み育てた時期」は、ほぼ1940年代-70年代に重なる。対象者の人々が生まれ、他者からの世話を必要とする程度が高い乳幼児期までの時期において重要な歴史的出来事あるいは潮流として、以下の諸点に注目される。

- ① 「植民地近代」下における人口移動
- ② 「植民地近代」下における、産育をめぐる近代的インフラの導入と受容あるいは反発
- ③ 「植民地近代」下における産育をめぐる規範の変容
- ④ 戦時下における生活破壊
- ⑤ 戦時下における人口政策

対象者の人々が自分の子どもを生み育てた時期にお

ける歴史的出来事あるいは潮流として注目されるのは以下の諸点である。

- ① 第二次世界大戦後の独立国家形成とその下での人口・家族政策の展開
- ② 社会主義国家形成とその下での人口・労働・家族政策の展開
- ③ 冷戦体制
- ④ 「家族計画」の波及
- ⑤ 産業化の進展
- ⑥ 資本主義社会における女性の主婦化
- ⑦ 民主化の進展と、それに伴う新たな家族価値の形成・波及

具体的な分析課題を以下の三点におき、5地域の質問紙調査データにもとづいて論述していく。

- ① それぞれの社会において、調査対象者の人々が「生まれ育った時代の産育ネットワーク」および「子どもを育てた時代の産育ネットワーク」がどのような特徴をみせるのか。
- ② 産育ネットワークの特徴は、それぞれの社会の「基層的家族・親族システム」とどのような関連をみせるのか。
- ③ 産育ネットワークの特徴と変化は、アジア社会の歴史的変化とどのような関連をみせるのか。

3. 調査の概要

(1) 調査方法

調査方法は質問紙調査である。5地域においてほぼ共通した質問紙を用い、調査員が面接して質問し、質問紙に記入する方法をとった。

(2) 調査地

調査地は、名古屋市（日本）、ソウル特別市（大韓民国）、テグ広域市（大韓民国）、大連市（中国）、イロコス・ノルテ州の州都ラワグ市および周辺町（フィリピン）の5地域である。(図1) 地域の選定は一貫した原理に基づいて行ったものではなく、調査プロジェクトのメンバーおよび各地域の調査協力者の勤務地または周辺都市、あるいは調査協力が得られやすい地域で調査を実施した。その点で、各国の調査地域は、その性格に一貫した共通性があるとは言えず、その点は本調査の限界である。また後述するように、各調査地におけるサンプリングの方法は機関や知己に頼って対象者を拡げていく「機縁法」である。その点で代表性のあるサンプリングということは言えない。以上のような限界はあるが、ほぼ同時期に同世代の人々に回答いただいた貴重なデータであるので、各地域の調査データの特徴をふまえたうえで、データの解釈を行っていくことにしたい。

a) 名古屋

名古屋市は、日本の本州中央部の濃尾平野に位置す

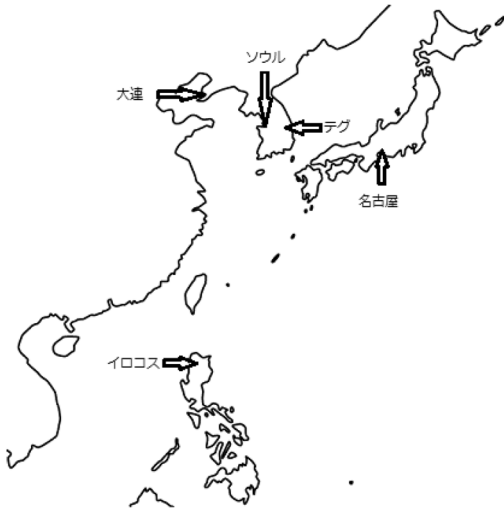


図1 調査地の位置

る大都市である。徳川時代に城下町として栄え、明治期以降も商工業都市として発展をとげた。太平洋戦争時には軍需産業の拠点となったために空襲の被害は大きく、市域の約四分の一が焼失した。第二次世界大戦後、焼け跡になった市街地を計画的に復興したことが、今日の市街の基礎となっている。高度経済成長期に入った1959年に伊勢湾台風が襲来し、死者1800人余におよぶ大災害となったことは、調査対象者の人々の人生に影響を与えた出来事として重要である。2013年4月1日時点での人口は2,262,176人（名古屋市公表データ、名古屋市ホームページ2013年9月27日参照。http://www.city.nagoya.jp）で、人口規模では東京都区、横浜市、大阪市に次ぐ大都市である。名古屋市を含む愛知県は第三次産業が過半数を占めている点では全国的動向と同様であるが、製造業をはじめとする第二次産業就業者割合が33.6%をしめており（2010年国勢調査）、日本国内各地および外国からも働くためにやってくる人を吸引する産業基盤をなしている。そのためもあってか、名古屋市を含む愛知県は総じて地元志向が強いことが指摘される。

名古屋市調査は三つの方法で対象者の調査協力を得た。名古屋市社会教育機関を拠点として社会活動をしている団体に協力を依頼する方法、高齢者就業支援センターを通して調査協力依頼する方法、調査員の個人的なつながりを通して協力依頼する方法である。

b) ソウル

ソウルは朝鮮半島の中央西部に位置する。古代には百済の都、高麗時代には三京の一つである南京、朝鮮時代には首都、現在は大韓民国の首都として、古代から現代まで、政治・経済・文化の中心地である。近代における日本による帝国主義支配からの解放後、大韓民国成立の翌年である1949年にソウル特別市となり、現在も政府直属の行政機関である。「日帝支配」からの解放後、1953年に勃発した朝鮮戦争で破壊されたが、

その後、1960年代以降に経済開発がすすむなか都市機能を拡大し、現在では巨大都市となっている。2010年の人口は9,631,482人であり、大韓民国の人口の約2割を占めている。（韓国統計庁ホームページ、2013年9月28日検索http://kosis.kr/）

ソウル調査での対象者選定方法は、性別、年齢、地域の経済水準に基づいた割り当て法である。男女比4:6、年齢は60代、70代、80代が同比率になるように設計した。地域は市内の区を住宅価格と基礎生活受給者比率を考慮して4地域に区分し、それぞれの地域で2つの区を選択した。最終的に選定された地域にある老人福祉館を訪ね、インタビューに応じる意思がある高齢者（各13名）を募集するよう依頼した。

c) テグ

テグ市は朝鮮半島の東南部、大韓民国慶尚北道の中央部に位置する、政府直轄の広域市である。新羅時代から地方の行政・軍事の要地であったが、朝鮮時代以降は慶尚北道の中心地となり、農産物の集散地として商業が栄えてきた。「日帝時代」であった1930年代から綿や毛織物などの繊維工業が発達しはじめ、現在も韓国における代表的な繊維工業地帯である。2010年のテグ市の人口は2,431,774人で、ソウル、プサン、インチョンに次ぐ第四位である。（韓国統計庁ホームページ検索、2013年9月28日検索。URLはソウルに同じ）

テグ調査の対象者は、1963年に設立された社会団体を通して、テグ市に居住し年齢条件にあう高齢者の人々に依頼した。

d) 大連

大連市はユーラシア大陸の東海岸に位置し、中国東北遼東半島の最南端にあり、東、西、南は海に向かい、北は広大な東北平野に隣接しており、東北、華北、華東地域が世界各地と繋がる海上の窓口としての役割を果たしている。行政区としては東北三省の南端にある遼寧省に属し、重工業で有名な同省の中で経済発展が最も進んだ港湾、貿易、工業、観光都市である。2010年の人口センサスによると、人口は6,690,432人である。

大連調査では三つの方法で対象者の協力を得た。一つは高齢者活動センターで活動をしている高齢者の協力を得る方法、二つ目は公園をよく利用する高齢者の協力を得る方法、三つ目は調査員の個人的なつながりで条件にあう人に協力を依頼する方法である。

e) イロコス

ラワック市は、ルソン島北西部のイロコス・ノルテ州に位置する。同市はスペインの植民地統治のなかで形成された地方社会の中心都市である。1965年に市制が施行されており、2007年の人口は102,457人である。調査がおこなわれたイロコス地方は、20世紀初頭のハワイへの男性の出稼ぎを始め、国内外に多くの移住者を送り出してきた。現在でも、海外からの送金に依存する世帯の比率が、他地域に比べて高い。

フィリピンの地方社会は、政治・経済・宗教の中心である州都と、州都を取り囲むように位置する町(municipality)によって構成されている。州都と町の中心には、たいてい庁舎やカトリック教会、公設市場が位置する市街地(Poblacion)があり、その周囲を複数の農村が市街地を取り囲むように位置する。州都や町の市街地は、かつては地方エリート家族の家が集中しており、周囲の農村部出身の人々とは階層関係が意識されていた。こうしたスペインの植民地支配以来の地方社会の成り立ちを踏まえ、本調査では、ラワグ市の市街地、ラワグ市の農村部、イロコス・ノルテ州のラワグ近郊の町の市街地とその農村部において調査を実施した。

ラワグ市では、地区の老人会による推薦、対象者による紹介、3名の調査助手の紹介によって調査を実施した。近郊の町では、町の老人会連合による推薦、調査助手の紹介によって調査を実施した。

(3) 調査時期

調査時期は、以下の通りである。

名古屋	2009年8-9月	ソウル	2009年4-5月
テグ	2009年3-4月	大連	2009年4-5月
イロコス	2009年9-11月		

(4) 調査対象者

調査対象者は、各地区に在住する1920-40年代生まれの高齢者(調査時点で65歳以上)と設定した。実際にはソウル、大連、イロコスデータに1910年代生まれの人が含まれることになった。貴重なケースであるので分析対象から除外することはせず、あわせて分析することにした。

それぞれの地域の有効ケース数は、名古屋82ケース、ソウル100ケース、テグ97ケース、大連223ケース、フィリピン81ケースである。

4. 調査対象者の属性

調査対象者の属性を、表1から表8に示した。属性データから読み取れる主な傾向は、以下の通りである。

- ① 回答者の性別割合は、以下の通りである。名古屋：男性48.8%、女性51.2%。ソウル：男性31.0%、女性69.0%。テグ：男性45.4%、女性54.6%。大連：男性45.7%、女性54.3%。イロコス：男性29.6%、女性70.4%。ソウルとイロコスにおいて、女性票が約7割と、女性に偏るデータとなった。
- ② 出生地は、名古屋、テグ、大連、イロコスでは調査地およびその周辺地域出身の人の割合が8割を超える。ソウルの対象者の出生地は、「北韓」ⁱⁱも含む、朝鮮半島のさまざまな地域に分散している。ソウルとテグにおいて「外国」出身の人がそれぞれ6.0%、7.2%と一定割合存在する。(表2)
- ③ 父の最長職は、イロコス、大連、テグ、ソウルにおいて「農林漁業」が最も多い。名古屋の父最長職が農林漁業である割合は18.3%と低い。専門、技術、管理、事務あわせたホワイトカラー層の割合は、名古屋36.6%、ソウル32.0%、テグ25.8%、大連11.6%、イロコス9.9%である。生産工程・労務職の割合は名古屋と大連で、やや多い。(表3)
- ④ 母のライフコースは、5地域いずれにおいても「継続就労」タイプと「仕事経験なし」タイプに二分

表1 生まれた年

	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
1910-1914	—	1.0	—	—	1.2
1915-1919	—	0.0	—	0.4	6.2
1920-1924	3.7	3.0	10.3	4.5	3.7
1925-1929	17.1	19.0	17.5	19.7	13.6
1930-1934	32.9	18.0	17.5	21.5	17.3
1935-1939	14.6	30.0	28.9	30.5	25.9
1940-1944	31.7	25.0	25.8	23.3	29.6
1945-1949	—	4.0	—	—	2.5
不明・無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
計	100.0 (N=82)	100.0 (N=100)	100.0 (N=97)	100.0 (N=223)	100.0 (N=81)

表2 生まれた場所

	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス				
名古屋市内	45.1	ソウル	17.0	ソウル	0.0	華東	9.9	P町	32.1
愛知県内	8.5	プサン	2.0	プサン	1.0	華南	0.0	ラワグ	54.3
東海地方	19.5	テグ	2.0	テグ	9.3	華中	0.9	州内	7.4
北海道	0.0	インチョン	2.0	インチョン	0.0	華北	4.0	イロコス地方	6.2
東北地方	1.2	クァンジュ	0.0	クァンジュ	0.0	西北	0.0	上記以外ルソン島	0.0
関東地方	2.4	テジョン	1.0	テジョン	0.0	西南	0.9	マニラ首都圏	0.0
甲信越地方	3.7	ウルサン	0.0	ウルサン	0.0	東北	84.3	上記以外フィリピン	0.0
北陸地方	3.7	京畿道	12.0	京畿道	1.0	台港澳	0.0	アメリカ	0.0
近畿地方	7.3	江原道	5.0	江原道	0.0	直轄市	0.0	外国	0.0
中国地方	0.0	忠清北道	2.0	忠清北道	4.1	外国	0.0		
四国地方	2.4	忠清南道	6.0	忠清南道	0.0	不明・無回答	0.0		
九州地方	2.4	全羅北道	10.0	全羅北道	0.0				
沖縄	0.0	全羅南道	9.0	全羅南道	0.0				
外国	3.7	慶尚北道	6.0	慶尚北道	75.3				
不明・無回答	0.0	慶尚南道	3.0	慶尚南道	1.0				
		済州道	2.0	済州道	0.0				
		北韓	15.0	北韓	1.0				
		外国	6.0	外国	7.2				
		不明・無回答	0.0	不明・無回答	0.0				
計	100 (N=82)	100.0 (N=100)	100.0 (N=97)	100.0 (N=223)	100.0 (N=81)				

される。ただし、父最長職に「農林漁業」が多いイロコス、大連、テグ、ソウルの場合、母は「仕事経験なし」とした人の中に農林漁業に従事したことがあるケースが、かなり含まれている可能性がある。仕事の中断を経験した人の割合は、名古屋で17.1%と、やや高い。(表4)

- ⑤ 自分のきょうだい数の最頻値は、名古屋4人(18.3%)、ソウル5人(25.0%)、テグ6人(24.7%)、大連4人(18.8%)、イロコス3人(21.0%)である。
- ⑥ 最終教育歴は地域とジェンダーによる違いがある。名古屋の女性は高校卒業が6割弱、男性は高卒層と大卒層がそれぞれ約4割である。ソウル、テグの女性は「教育を受けていない」層から高等教育を受けた人まで、広く分布している。男性は高等学校卒業以上の人が多くを占め、大学以上の高等教育を受けた人の割合はソウル67.7%、テグ47.8%である。韓国、特にソウルの男性対象者は高学歴層に偏っている。大連は男女共に中学校卒業の人

が約3割と最も多い。「教育を受けていない」人の割合は女性約3割、男性1割弱である。イロコスは他地域と異なり、女性のほうが高学歴、特に大卒以上の人が多い点に特徴がある。(表5)

- ⑦ 初職が農業であった人の割合は、イロコス男性の66.7%が際立って高い。大連では初職が農業の人が男性20.6%、女性25.6%と、やや高い割合である。初職がホワイトカラー(専門、技術、管理、事務)である男性の割合は名古屋、ソウル、テグで5割を超える。特にテグは79.6%と初職がホワイトカラーであった人がとても多い。その点でこの3地域の対象者は、この世代の人々の中では、やや階層の高い人々である。イロコスの場合、男女の違いが著しく、女性でホワイトカラー層、特に専門・技術職の割合が28.1%と高い。(表6)
- ⑧ 女性について本人のライフコースをみると、いずれの地域でも「仕事経験なし」の人の割合は、母親のライフコースにおけるそれよりも少ない。継続就労の人の割合は名古屋、ソウル、テグで母親のライフコースにおける割合を下回り、大連とイロコスでは、母親のライフコースにおける割合を上回っている。イロコスの場合、専門職女性が対象者の多くを占めること、大連の場合は社会主義国家成立後の女性労働の状況を反映していると考えられる。「中断」型(「中断再就労」「結婚後中断」を合わせる)のライフコースを歩んだ人は、名古屋(47.6%)とソウル(33.3%)で多い。男性について妻のライフコースをみると、ソウル、テグ、イロコスで「仕事経験なし」の人の割合が女性本人の回答割合と比べて多い点に注目される。ソウル、テグの場合は男性回答者の階層の高さ、イロコスの場合は男性回答者のうち農林漁業従事者の多さが、影響を与えていると考えられる。(表7)
- ⑨ 生まれた子どもの人数は、名古屋では2人が最頻値で61.0%を占める。1950年代の少産化政策を経過して「二人っ子」を育てた世代の人々であることを反映している。ソウルの最頻値は2人と3人がそれぞれ25.0%、テグと大連は3人(テグ37.1%、大連26.0%)、イロコスは4人(19.8%)である。

表3 父の最長職 (%)

	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
専門	17.1	8.0	12.4	5.4	6.2
技術	—	9.0	1.0	—	—
管理	12.2	5.0	7.2	5.8	2.5
事務	7.3	10.0	6.2	0.4	1.2
販売	14.6	14.0	4.1	6.7	0.0
サービス	3.7	1.0	1.0	4.0	2.5
保安	1.2	1.0	0.0	2.2	0.0
農林漁業	18.3	42.0	58.8	56.5	70.4
運輸・通信	0.0	—	—	2.2	2.5
生産工程・労務	13.4	1.0	3.1	13.0	7.4
軍人	—	0.0	0.0	—	—
分類不能	1.2	—	—	1.3	4.9
その他	—	4.0	5.2	0.9	0.0
無職	0.0	3.0	1.0	0.9	—
不明・無回答	11.0	2.0	0.0	0.4	2.5
計	100.0 (N=82)	100.0 (N=100)	100.0 (N=97)	100.0 (N=223)	100.0 (N=81)

表4 母のライフコース (%)

	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
継続就労	31.7	41.0	36.1	39.0	37.0
中断再就労	7.3	7.0	0.0	0.4	1.2
結婚後中断	9.8	1.0	3.1	2.7	3.7
育児後就労	1.2	9.0	6.2	7.6	1.2
仕事経験なし	40.2	37.0	51.5	48.0	51.9
その他	7.3	3.0	3.1	1.8	0.0
不明・無回答	2.4	2.0	0.0	0.4	4.9
計	100.0 (N=82)	100.0 (N=100)	100.0 (N=97)	100.0 (N=223)	100.0 (N=81)

表5 最終教育歴 (%)

	名古屋		ソウル		テグ		大連		イロコス	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
教育を受けていない	0.0	0.0	0.0	10.1	2.3	18.9	9.8	32.2	0.0	0.0
書堂	—	—	0.0	1.4	0.0	0.0	—	—	—	—
初等学校	0.0	0.0	12.9	29.0	11.4	26.4	18.6	16.5	41.7	45.8
中学校	12.5	4.8	3.2	17.4	0.0	11.3	33.3	29.8	—	—
高等学校	40.0	57.1	16.1	21.7	36.4	34.0	14.7	9.1	20.8	8.8
短期大学	2.5	11.9	0.0	2.9	2.3	0.0	7.8	8.3	12.5	3.6
大学	37.5	9.5	64.5	15.9	36.4	5.7	9.8	3.3	20.8	21.1
大学院以上	0.0	0.0	3.2	0.0	11.4	0.0	1.0	0.0	4.2	19.3
その他	7.5	16.7	0.0	1.4	0.0	3.8	2.9	0.0	0.0	0.0
不明・無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	0.8	0.0	1.8
計	100.0 (N=40)	100.0 (N=42)	100.0 (N=31)	100.0 (N=69)	100.0 (N=44)	100.0 (N=53)	100.0 (N=102)	100.0 (N=121)	100.0 (N=24)	100.0 (N=57)

表6 本人の初職

(%)

	名古屋		ソウル		テグ		大連		イロコス	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
専門	30.0	16.7	19.4	15.9	43.2	18.9	23.5	16.5	4.2	28.1
技術	5.0	0.0	12.9	1.4	9.1	7.5				
管理	10.0	35.7	0.0	0.0	6.8	0.0	5.9	3.3	0.0	1.8
事務	12.5	9.5	22.6	14.5	20.5	0.0	10.8	5.8	0.0	12.3
販売	5.0	4.8	6.5	10.1	2.3	15.1	9.8	7.4	0.0	5.3
サービス	2.5	0.0	3.2	13.0	0.0	1.9	4.9	9.1	8.3	28.1
保安	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	0.8	0.0	0.0
農林漁業	5.0	2.4	9.7	14.5	2.3	7.5	20.6	25.6	66.7	12.3
運輸・通信	17.5	11.9	—	—	—	—	4.9	0.8	4.2	0.0
生産・労務	7.5	2.4	6.5	14.5	4.5	7.5	11.8	13.2	8.3	1.8
軍人	—	—	16.1	0.0	0.0	0.0	—	—	8.3	0.0
分類不能	0.0	0.0	—	—	—	—	0.0	0.0	0.0	0.0
その他	—	—	0.0	0.0	9.1	3.8	2.0	1.7	—	—
無職	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0	17.0	2.9	15.7	0.0	10.5
不明・無回答	2.5	16.7	3.2	14.5	2.3	20.8	1.0	0.0	0.0	0.0
計	100.0 (N=40)	100.0 (N=42)	100.0 (N=31)	100.0 (N=69)	100.0 (N=44)	100.0 (N=53)	100.0 (N=102)	100.0 (N=121)	100.0 (N=24)	100.0 (N=57)

表7 女性のライフコース (本人および妻)

(%)

	名古屋		ソウル		テグ		大連		イロコス	
	本人	妻	本人	妻	本人	妻	本人	妻	本人	妻
継続就労	21.4	20.0	26.1	12.9	17.0	29.5	43.0	49.0	56.1	66.7
中断再就労	33.3	12.5	17.4	12.9	0.0	0.0	10.7	5.9	7.0	12.5
結婚後中断	14.3	30.0	15.9	19.4	13.2	4.5	5.0	2.9	14.0	0.0
育児終了後就労	11.9	17.5	15.9	9.7	18.9	6.8	5.0	9.8	1.8	0.0
仕事経験なし	11.9	15.0	14.5	38.7	35.8	54.5	21.5	24.5	7.0	20.8
その他	4.8	5.0	8.7	0.0	7.5	4.5	5.0	2.9	0.0	0.0
不明・無回答	2.4	0.0	1.4	6.5	7.5	0.0	9.9	4.9	14.0	0.0
計	100.0 (N=42)	100.0 (N=40)	100.0 (N=69)	100.0 (N=31)	100.0 (N=53)	100.0 (N=44)	100.0 (N=121)	100.0 (N=102)	100.0 (N=57)	100.0 (N=24)

5. 産育のネットワーク：生まれ、育った時

(1) 出産

各地域の対象者の人々が生まれ、育った時期の「産育」のネットワークを見ていこう。まず、産まれた場所と、出産時にとりあげた人についての表を示す。

表8からまず読み取れるのは、5地域のいずれにおいても、対象者の人々が産まれた一般的な場所は「自宅」だということである。名古屋では「父方の家」が32.9%と最も多く、ソウル、テグ、大連、イロコスでは「新居」が最も多い(ソウル76.0%、テグ59.8%、大連74.0%、イロコス61.7%)。名古屋で「父方の家」が多いのは婚家での出産が多いということだが、これは愛知県の地域特性を反映している可能性があるⁱⁱⁱ。ソウル、テグも女性が婚家に嫁いで「嫁」になる地域であるが、「夫方の家」の割合は名古屋ほど多くはない。この要因として、植民地期の人口移動や社会的混乱の影響

響および、ソウルとテグの対象者に父ホワイトカラー層が多いというサンプルの特性が考えられる。病院出産は名古屋が11.0%と5地域の中では多く、ソウル、テグ、大連でも数%であるが存在する。イロコスは病院で産まれたと回答した人はいない。

本人が産まれた時に取り上げた人については、ソウルとテグで親族が出産介助をしている割合が多く、特に「父方祖母」が多いのが特徴的である。ソウル、テグは「本人が産まれた場所」としては新居が多いが、出産のネットワークとしては父方祖母が機能している。他方、名古屋、大連、イロコスでは「産婆」の割合が高い(名古屋73.2%、大連48.0%、イロコス82.7%)。この「産婆」の意味は地域によって異なる。日本の場合、地域の伝統的助産者(取り上げ婆さん)から職業産婆への移行は1930年代にはほぼ達成されていたという先行研究の知見(宮坂、2009、吉村、1985)と対象者に都市部(名古屋市)生まれの人が多くことをあわ

表8 産まれた場所

(%)

	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
父方の家	32.9	12.0	18.6	8.1	16.0
母方の家	14.6	3.0	16.5	3.6	13.6
新居	18.3	76.0	59.8	74.0	61.7
助産所	3.7	2.0	0.0	0.4	0.0
病院	11.0	5.0	3.1	5.8	0.0
その他	4.9	0.0	1.0	0.0	3.7
知らない	14.6	2.0	1.0	5.8	4.9
不明・無回答	0.0	0.0	0.0	2.2	0.0
計	100.0 (N=82)	100.0 (N=100)	100.0 (N=97)	100.0 (N=223)	100.0 (N=81)

表9 産まれた時、取り上げた人

(%)

	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
父方の祖母	0.0	24.0	45.4	4.5	0.0
母方の祖母	1.2	10.0	18.6	1.8	0.0
父親	0.0	9.0	3.1	0.9	0.0
産婆	73.2	9.0	5.2	48.0	82.7
医者	9.8	4.0	3.1	10.3	3.7
助産師	—	—	—	—	4.9
その他	1.2	21.0	9.3	0.0	2.5
知らない	14.6	22.0	15.5	30.0	6.2
不明・無回答	0.0	1.0	0.0	4.5	0.0
計	100.0 (N=82)	100.0 (N=100)	100.0 (N=97)	100.0 (N=223)	100.0 (N=81)

表10 預けられたところ

	(人数)				
	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
父親の実家	1	2	1	4	1
母親の実家	0	2	3	4	3
その他の親族	2	1	0	8	6
それ以外の人	1	0	0	0	0
託児所など施設	0	0	0	0	0
その他	3	3	1	1	0
不明・無回答	0	0	0	0	0
計	7	8	5	17	10

せ考えれば、名古屋の対象者が回答した「産婆」は職業産婆が大勢を占めると考えられる。イロコスについては調査票作成段階で地域の伝統的助産者と医療助産師を別カテゴリーに設定していた。したがってイロコスの「産婆」の回答は地域における伝統的助産者（男性を含む）^{iv}である可能性が高い。大連の場合も、特に農村部においては、地域における伝統的助産者がその中心を占めていたと考えられる^v。

(2) 育った時のネットワーク

次に対象者の人々が育った時の人間関係網について、「幼いとき親から離れた経験」「養子経験」「世話してくれた人」に注目してみよう。

「幼いとき親から離れた経験」が「ある」とした人は、名古屋8.5%、ソウル8.0%、テグ5.2%、大連7.6%、イロコス12.3%である。預けられたところは、いずれも親族が中心である^{vi}。大連とイロコスでは「父方、母方の実家」以外の「その他の親族」に預けられたとする人が、「預けられた人」全体の半数以上を占める。この二地域では、子どもの時に預けられた親族の範囲が、傍系親族を含む広い範囲に広がっていると考えられる。

養子に行った経験をもつ人は、名古屋2.4%、ソウル2.0%、テグ1.0%。大連0.9%、イロコス1.2%と、いずれの地域でも少ない。

表11に「幼いとき、一番世話をしてくれた人」、表13に「その他に世話をしてくれた人」のデータを示す。

「幼い時、一番世話をしてくれた人」は、いずれの地域でも「母親」が一番多く、約7-8割を占める。親族の中では、名古屋、ソウル、テグで「父方の祖母」が1割程度で、「母方祖母」よりも優勢である。大連では「父と母」「父と祖母」など、複数の人をあげた人が10.8%と多い点特徴的である^{vii}。イロコスの回答者で特徴的なのは「その他の親族」を選択した人が8.6%と、一定程度いることである。

「その他に世話をしてくれた人」をみると、いずれの地域でも「父親」が最も割合が多いが、ソウル、テグ、大連、イロコスでは5割前後を占めるのに対し、名古屋では29.3%と、やや低い。「きょうだい」カテゴリーも、いずれの地域でも約2割と、よく選択されている。祖父母カテゴリーをみると、ソウルとテグで父方祖父母が優勢の傾向はここでもみられる。名古屋と大連では父方祖父母と母方祖父母は拮抗しており、イロコス

表11 幼いとき、一番世話をしてくれた人

	(%)				
	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
父親	1.2	2.0	4.1	6.7	1.2
母親	74.4	70.0	80.4	66.4	74.1
父方の祖父	0.0	0.0	1.0	0.9	0.0
父方の祖母	8.5	12.0	9.3	0.0	2.5
母方の祖父	0.0	0.0	1.0	4.9	0.0
母方の祖母	4.9	0.0	2.1	2.7	3.7
きょうだい	4.9	9.0	1.0	3.6	3.7
その他の親族	1.2	2.0	1.0	1.3	8.6
使用人	1.2	2.0	0.0	0.4	1.2
それ以外の人	2.4	3.0	0.0	1.3	3.7
その他(複数の人)	1.2	0.0	0.0	10.8	0.0
不明・無回答	0.0	0.0	0.0	0.9	1.2
計	100.0 (N=82)	100.0 (N=100)	100.0 (N=97)	100.0 (N=223)	100.0 (N=81)

表12 その他に世話をしてくれた人(複数回答)

	(%)				
	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
父親	29.3	46.0	47.4	49.8	45.7
母親	18.3	22.0	17.5	11.2	8.6
父方の祖父	8.5	4.0	9.3	17.5	6.2
父方の祖母	8.5	10.0	21.6	9.9	6.2
母方の祖父	4.9	2.0	0.0	21.1	4.9
母方の祖母	8.5	7.0	3.1	12.1	14.8
きょうだい	20.7	24.0	18.6	22.4	22.2
その他の親族	7.3	6.0	4.1	9.0	21.0
使用人	6.1	4.0	2.1	0.4	3.7
それ以外の人	6.1	2.0	4.1	4.5	0.0
不明・無回答	1.2	17.0	7.2	9.9	14.8
N	82	100	97	223	81

は母方祖父母、特に母方祖母の割合が高い。「その他の親族」は、イロコスで21.0%と高く特徴的である。

6. 産育のネットワーク：産み、育てた時

(1) 出産

続いて対象者の人々が自分の子どもを産み育てた時の産育のネットワークについて、データを示す。

表13は、対象者の人々の子どもが生まれた場所を、第一子、末子それぞれについて各地域ごとに示したものである。いずれの地域でも自分が生まれた時と比べて、出産の医療化が進行したことがわかる。なかでも名古屋は、第一子の病院出産の割合が79.3%と突出している。ソウル、テグ、大連、イロコスでは病院出産が一定の割合を占めるようになったとはいえ、「新居」の割合が、第一子、末子とも4-5割を占めている。第一子と末子の違いに着目すると、テグのデータにおいて、第一子では一定の割合を占めていた「夫方の家」「妻方の家」で子どもが生まれた人が末子ではほとんどいなくなり、第一子で2割弱であった病院出産が末子の時には35.1%になっているのが特徴的である。

子どもを取り上げた人においても、いずれの地域でも医療化の進展をみてとることができる。名古屋では第一子を取り上げた人が医者である人が78.0%を占め、自分が生まれた時の産婆と医師の割合が、ほぼ逆転している。ソウルとテグは自分が産まれた時と比べて祖母の割合が減り、医者と産婆が増加している。ソウルとテグを比べるとテグのほうが親族の占める割合

表13 自分の子どもが産まれた場所

(%)

	名古屋		ソウル		テグ		大連		イロコス	
	第一子	末子	第一子	末子	第一子	末子	第一子	末子	第一子	末子
夫方の家	3.7	4.9	5.0	1.0	14.4	2.1	1.8	1.3	4.9	6.2
妻方の家	2.4	1.2	8.0	3.0	9.3	0.0	3.1	1.3	11.1	4.9
新居	2.4	0.0	46.0	42.0	49.5	53.6	56.5	48.0	56.8	54.3
助産所	6.1	4.9	4.0	4.0	4.1	1.0	6.3	7.2	0.0	1.2
病院	79.3	69.5	33.0	36.0	19.6	35.1	30.9	38.6	14.8	17.3
その他	1.2	1.2	0.0	0.0	2.1	1.0	0.0	0.0	1.2	1.2
知らない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
不明・無回答	4.9	18.3	4.0	14.0	1.0	7.2	1.3	3.6	11.1	14.8
計	100.0 (N=82)		100.0 (N=100)		100.0 (N=97)		100.0 (N=223)		100.0 (N=81)	

表14 自分の子どもが生まれた時、取り上げた人

(%)

	名古屋		ソウル		テグ		大連		イロコス	
	第一子	末子	第一子	末子	第一子	末子	第一子	末子	第一子	末子
父方の祖母	0.0	0.0	13.0	3.0	32.0	14.4	4.0	2.2	0.0	0.0
母方の祖母	1.2	1.2	7.0	6.0	12.4	6.2	1.8	1.3	0.0	0.0
父親	0.0	0.0	9.0	5.0	3.1	9.3	0.9	0.9	0.0	1.2
産婆	12.2	9.8	15.0	16.0	17.5	12.4	46.2	32.7	55.6	48.1
医者	78.0	68.3	33.0	37.0	18.6	35.1	41.7	55.6	19.8	19.8
助産師	—	—	—	—	—	—	—	—	13.6	14.8
その他	3.7	1.2	14.0	15.0	15.5	14.4	0.4	0.4	1.2	2.5
知らない	0.0	0.0	3.0	2.0	0.0	1.0	2.7	2.2	0.0	0.0
不明・無回答	4.9	19.5	6.0	16.0	1.0	7.2	2.3	4.5	9.9	13.6
計	100.0 (N=82)		100.0 (N=100)		100.0 (N=97)		100.0 (N=223)		100.0 (N=81)	

が高い。大連は第一子においては産婆ⁱⁱⁱと医者がそれぞれ4割台と拮抗しているが、末子になると医者が5割を超える。イロコスは「産婆」（男性が含まれている可能性がある）が第一子、末子とも約5割と多数派であるが、医者と助産師あわせて第一子、末子とも3割を超えるようになっている。

(2) 育てたネットワーク

「子どもが幼い時、人に預けて離れて暮らした経験」をもつと回答した人は、名古屋4.9%、ソウル4.0%、テグ10.3%、大連13.0%、イロコス24.7%である。自分が幼いとき親から離れた経験をもつ人の割合（名古屋8.5%、ソウル8.0%、テグ5.2%、大連7.6%、イロコス12.3%）と比較すると、名古屋とソウルで自分が親になった時期のほうがやや少なく、テグ、大連、イロコスで親になった時期のほうが多くなっている。特にイロコスでは倍増しており、自分が親になった時代では約四分の一の人が「子どもが幼い時に人に預けた経験」をもっていたと回答している。預けた先で注目されるのは第一に、大連で「自分が幼かったとき」に比べて「その他の親族」が少なく、「母の実家」「託児所などの施設」が多くなっていることである。社会主義国家に移行するなかで、生活の場から離れて働く女性が増えたこと、育児の社会化（公共化）がすすんだことが背景にあると考えられる。第二に、イロコスで「自分が幼かったとき」には見られなかった「その他の人」が8ケースと、無視できない割合で存在する。イロコスの「その他の人」の回答の多くは「子持ち（yaya）」であり、調査者が意図した「親と離れて居住」という意味を取り違えた回答も含まれている可能性があるが、それにしても「家族・親族以外の人に預けて親と離れて

表15 子どもが幼いとき、預けたところ（複数回答）

(人数)

	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
父親の実家	1	0	5	4	1
母親の実家	0	3	3	15	2
その他の親族	0	1	1	5	7
それ以外の人	1	1	2	3	8
託児所などの施設	0	1	0	7	0
不明・無回答	2	0	0	0	2
N	4	4	10	29	20

生活した」経験を持つとの回答が多くなっている、ということである。

子どもを養子に出した経験がある人の割合は名古屋0%、ソウル1.0%、テグ1.0%、大連1.8%、イロコス1.2%、養子をもたらした経験がある人の割合は名古屋1.2%、ソウル0%、テグ3.1%、大連0.9%、イロコス3.7%である。対象者の人々が子どもを育てた時期についても、いずれの地域でも養子は一般的ではない。

「子供が幼い頃、一番世話をした人」のデータでは三つの点に注目される。第一に、いずれの地域でも母親が第一位である。特に名古屋、ソウル、テグで母親に集中する傾向が強い。第二に、名古屋、ソウル、テグにおいて、「自分が幼かった頃、一番世話をした人」と比べると、世話をした人のカテゴリーに単純化がみられる。名古屋、ソウル、テグで一定程度存在した「父方祖母」をあげる人は皆無あるいはほとんどみられなくなっている。第三に、大連とイロコスで、世話の与え手に広がりが見られる点で、「自分が幼かった頃」と共通する傾向がみられる。大連では「複数の人」と回答した人（10.8%）が、自分が育った時同様、一定程度いる。イロコスでは「自分が幼かった頃」に一定割合存在した「その他の親族」は1.2%であるが、「家政婦」の割合が8.6%で、一定程度みられる。

表16 子どもが幼い頃、一番世話をした人 (%)

	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
父親	0.0	2.0	1.0	9.5	6.2
母親	87.8	83.0	77.3	67.1	63.0
父方祖父	1.2	5.0	0.0	2.3	0.0
父方祖母	3.7		7.2	3.6	2.5
母方祖父	1.2	4.0	0.0	0.5	0.0
母方祖母	0.0		3.1	2.7	3.7
父方きょうだい	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0
母方きょうだい	0.0	0.0	3.1	0.0	0.0
子どものきょうだい	0.0	—	1.0	0.9	0.0
その他の親族	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2
家政婦	0.0	1.0	3.1	0.5	8.6
近所の人	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0
その他	1.2	1.0	1.0	0.0	4.9
複数の人	1.2	—	—	10.8	—
不明・無回答	3.7	4.0	1.0	2.3	9.9
計	100.0 (N=82)	100.0 (N=100)	100.0 (N=97)	100.0 (N=223)	100.0 (N=81)

表17 子どもが幼い時、その他に世話をした人(複数回答) (%)

	名古屋	ソウル	テグ	大連	イロコス
父親	39.0	34.0	42.3	52.5	38.3
母親	9.8	11.0	10.3	12.6	9.9
父方祖父	7.3		3.1	9.4	3.7
父方祖母	25.6	13.0	10.3	20.6	18.5
母方祖父	0.0		0.0	5.8	2.5
母方祖母	22.0	10.0	6.2	9.9	17.3
父方きょうだい	4.9	0.0	6.2	3.1	3.7
母方きょうだい	1.2	2.0	4.1	4.0	6.2
子どものきょうだい	1.2	—	6.2	13.5	4.9
その他の親族	1.2	1.0	1.0	2.7	6.2
家政婦	1.2	8.0	5.2	0.0	11.1
近所の人	1.2	1.0	1.0	3.1	3.7
その他	1.2	0.0	5.2	1.3	2.5
不明・無回答	4.9	28.0	25.8	13.5	21.0
N	82	100	97	223	81

「それ以外に、子どもの世話をした人」で注目されるのは、第一に、いずれの地域でも父親をあげる人の割合が一番多いことである。これは、「自分が幼かった頃」のデータと同様の傾向である。第二に、ここでも「世話の与え手」のカテゴリーに単純化がみられることである。特に「(子どもの) きょうだい」カテゴリーの減少が、名古屋、テグ、大連、イロコスのデータにおいて顕著にみられる。^{ix}

7. 考察

以上、各地域の対象者の人々が生まれ育った時期の産育のネットワーク、自分の子どもを産み育てた時期の産育のネットワークについて調査から得られた知見を、それぞれの時期と地域の特徴に注目して記述してきた。ここで、2で設定した分析課題のうち、「②産育ネットワークの特徴と基層的家族・親族システムの関連」と、「③産育ネットワークの特徴および変化とアジア社会の歴史的变化との関連」に即して、考察する。

(1) 基層的家族・親族システムと産育のネットワーク

基層的家族・親族システムと産育のネットワークとの関連に関してまず指摘できるのは、両者間の親和性

である。しかしその親和性は、固定的なものではなく、歴史的な文脈のなかで弱まったり、形を変えながらも維持されたり、強化されたりするものであった。

父系制直系家族制の家族・親族システムを基層にもつ社会(ソウル、テグ)では、自分が生まれ育った時代に父方祖母が出産、育児に果たす役割が大きかった。それが子どもを産み育てた時代には、父方祖母が出産の介助者になる割合は少なくなり、代わって医療関係者が浮上している。育児についても子どもを育てた時代には、父方祖母のケア役割は弱くなり、ケアの与え手の単純化がみられた。出産の医療化と産業化による人口移動、近代(資本主義)的母性規範の浸透が、この変化に影響を与えた要因として考えられる。

名古屋は、一人の子どもが単独継承し結婚後も親と同居する「家」を基層的家族・親族システムとする地域である。名古屋においても自分が生まれた場所は「父方の家」が多く、自分が育った時のケアのネットワークにおいて父方祖母が優勢であった。これは、調査地域およびその周辺が長男継承で嫁入婚の傾向が強い地域的特性を反映している可能性がある^x。しかし、自分の子どもが生まれ育った時期には、出産の場所は医療機関に移行しており、ケアの第一の与え手は母親に集中し、ケアの支え手としての祖母役割に双方化の傾向がみられる。名古屋の場合、生まれ育った時期から産み育てる時期の間の変化の背景として、出産の医療化、家規範の弱化、近代(資本主義)的母性観念の浸透などが考えられる。

非単系的家族・親族システムを基層としてもつ地域である大連、イロコスでは、育児ネットワークの範囲が広い傾向がみられる。自分が産まれた時代のケアの第一の与え手として、大連では「複数の人」をあげる人、イロコスでは「その他の親族」をあげた人が多かった点に、その傾向は顕著にみられる。大連とイロコスでは、自分が「幼い時に預けられた先」として「その他の親族」をあげた人が一定数存在していた点も共通している。

大連とイロコスでは、自分が育った時の育児ネットワークについても、ネットワークの範囲が広い傾向は持続している。大連では、自分の子どもが育った時代にも、第一のケアの与え手として「複数の人」をあげる人が一定数存在する。イロコスでは第一のケアの与え手として「その他の親族」はほとんどいなくなり、代わって「家政婦」が浮上していた。このように、大連とイロコスでは自分が育った時代、自分の子どもが育った時代いずれにおいてもマルチプル・ペアレンティング(青柳、1987)とでも言う傾向がみられたのである。さらにこの二地域では、子どもを育てた時代にマルチプル・ペアレンティングの傾向が強まった現象も観察できた。それは、大連とイロコスでは、子どもが「幼い時に人に預けて離れて暮らした経

験」を持つ人が、自分が育った時期よりも多くなっていった点である。前述したようにデータ解釈には慎重を要するが、イロコスでその傾向が顕著にみられる点に注目された。大連の場合「その他の親族」が少なく、「母の実家」「託児所などの施設」が多くなっていった。社会主義国家の建設によって、女性の家庭外就労と子育ての外部化（公共化）が進み、そのことと関連して子育てを支える親族ネットワークが単純化したことが考えられる。イロコスの場合は「子どもを人に預けて離れて暮らした人」が対象者の四分の一にのぼり、預けた人のカテゴリーに「その他の人」が加わったことから、養育のネットワークがさらに拡大したことが推測された。教員などの、主として市街地在住の女性の就業機会の拡大と、1970年代以降の国際移住労働の拡大がこうした養育のネットワークの変化に関わっていると考えられる。

(2) 出産の医療化の、複数の道筋

5つの地域の出産場所、出産の介助者にかんするデータから、出産領域への西洋医療の導入プロセスには、複数の道筋があることが考えられた。日本の場合は、地域の伝統産婆（取り上げ婆さん）から医療産婆への転換、さらに医師への転換という道筋をたどったことがわかっている。名古屋調査の対象者の人々が生まれた時は医療産婆への医療化がほぼ達成され、子どもが生まれた時期は産婆から医者への転換が進行した時期にあたっている。ソウル、テグの場合、対象者の人々が産まれた時期は親族、特に父方祖母が介助する自宅出産が主流であった。自分が出産したときは、病院出産および医者・産婆の介助への移行が進行している。単純化すれば親族（特に父方祖母）から医療専門家（特に医師）という道筋である。²¹大連の場合、自分が産まれた時は新居で「産婆」（地域の伝統的助産者が主流だったと推測される）による介助が主流であったが、自分の子どもが生まれた時は自宅から病院出産へ、「産婆」から医者への変化が起こっている。イロコスの場合、自分が産まれた時期、自分の子どもが生まれた時期ともに、自宅で、伝統的助産者（男性を含む）の介助による出産が主流である。ただし自分の子どもが生まれた時期には病院出産、医者・助産師による出産が導入されてきている。

上記のような各地域の「出産の医療化」プロセスから考えられることは、西洋医療が導入される前の「産」にかかわるネットワーク・パターンと西洋医療が浸透した時期によって、出産の医療化プロセスのバラエティが生じる、ということである。西洋医療が浸透する前の「産」のネットワーク・パターンが親族中心であったか、地域の熟練者中心であったか、女性に限定されていたか、男性も含むものであったか、などのパターンの違いによって、西洋医療の受容／抵抗や浸透時期、

浸透速度の相違がもたらされたのではないだろうか。さらに、植民地にされた社会の人々にとって、西洋医療の導入者のナショナリティ／エスニシティ／ジェンダーもまた、西洋医療の受容／抵抗のあり方に影響を与えた可能性がある。出産は、セクシュアリティ、生／死の境界、血統の継承など、個人の人生と社会双方にとって、多義的で重大な意味をもつ出来事であり、近代的インフラの導入にあたって、植民者の介在に対する抵抗が生じやすい領域であることも、「出産の医療化」の複数化をもたらした一因であるかもしれない。以上のようなことは本研究のデータからは論証できないが、アジア諸社会におけるライフコースの伝統／近代を考えるうえで、重要な論点になると思われる。

8. 結論

本稿の結論を、大きく二つの論点について要約する。一つは、ケアのネットワークの変容過程を「基層的家族・親族システム」と歴史的時代の混合としてみる視角にかかわる論点である。アジア5地域における産育ネットワークの変容過程の比較考察を通して、この視角の一定の有効性を示すことができた。本稿での検討によると「基層的家族・親族システム」とケア・ネットワークは親和性をみせたが、その親和性は固定的なものではなく、歴史的時代のなかで維持、再編成、弱化、強化など、多方向的な変容過程をたどるものであった。従来の家族変動論では近代化にともなう「基層的家族・親族システム」の衰退の側面に焦点が当てられる傾向が強かったことを思えば、本稿の検討をとおして、特に非単系社会とされる大連とイロコスにおいて「基層的家族・親族システム」が強化、再編成されるベクトルがみられたのは、興味深い知見である。ここから、親からの継承や親との居住関係が特定の子どもに限定されない家族・親族のあり方は、国家体制の変容やグローバル化などの大きな社会変動の際にも、適応を示しやすい、という仮説が考えられる。

第二に、近代的インフラの浸透とライフコースの関連に関する論点である。本稿の検討を通して、5地域における出産の医療化には複数のパターンがあったことがみてとれた。①地域の伝統的助産者→医療産婆→医者（名古屋）、②地域の伝統的助産者→医療専門家（大連、イロコス）、③親族（父方優勢）→医療専門家（ソウル、テグ）の3パターンである。このような相違をもたらした社会背景を、20世紀前半までの「植民地近代」とのかかわりで考察を深めることは、家族史のみならず社会史研究の課題としても、重要である。その際、避妊・中絶、教育、福祉など、他の近代的インフラや科学技術とライフコースのかかわりとの比較視点をもって考察することは、人生と歴史に関する認識を豊かなものにするうえで有効だと考えられる。

注

- ⁱ 調査は、2007年—2009年度の科学研究費助成を受けて実施した。(研究課題名:「20世紀アジアの社会変動と高齢者のライフコース: 家族イベントの聞き取りを通して—」(基盤B) 研究代表者: 山根真理 (愛知教育大学)).
- ⁱⁱ 「北韓」は、朝鮮民主主義人民共和国の、大韓民国で一般的に用いられる呼び方である。ここでは、調査票の表記に従って「北韓」と記載する。
- ⁱⁱⁱ 名古屋サンプルの出生場所と出生地域とのクロス分析を行ったところ、愛知県で生まれた人はそれ以外の地域で生まれた人よりも「父方の家」で生まれた人が多い傾向にあった。
- ^{iv} フィリピンの地方の農村部では、基本的に地域の伝統的助産者(男性を含む)が出産の補助をした。1954年以来、政府は、それら伝統的助産者に対して、研修をおこなう政策を展開してきた。下記文献によれば、1971年の調査では16%が男性だったようである。(Mangay-Angara, Amansia, 1981)
- ^v 調査時の聞き取りによると、かつて農村部ではほとんどの人が家で出産し、病院の他には、専門地域を持って出産の仕事をする人はいなかった、ということであった。
- ^{vi} 名古屋では7人中3人が「その他」であるが、この3ケースは疎開をしたケースである。
- ^{vii} 単数回答の質問項目であるにもかかわらず、大連の回答では、複数の選択肢に○をつけていた回答者が多かった。
- ^{viii} 大連における「産婆」の回答には、医療的訓練を受けた職業産婆と地域の伝統産婆が混じっている可能性がある。
- ^{ix} ソウルのデータは「世話をした人」のカテゴリーの構成が、他地域と異なっており、「きょうだい」カテゴリーが入っていないため、比較できない。
- ^x 「家」についての歴史社会学研究との対話が必要である。
- ^{xi} イ・ジョンチャンらによれば、朝鮮の「産婆」は植民地期に病院で訓練を受ける医療助手として養成され、日本統治の「産婆」に関する政策は日本人の朝鮮への移民を促進するために採用されたが、朝鮮の人々は早婚の慣習と女性を家内的存在とする観念のために産婆や看護婦に対してよい認識をもたなかった。このような文脈で、産婆は植民地期には朝鮮の人々にはあまり受容されず、1960年代以降に国家政策としての家族計画が普及するなかで医師が主要な出産介助者になった。(イ・ジョンチャン他、2009: 400-402)

文献

[日本語]

- 安藤由美, 1998『激動の沖縄を生きた人々—ライフコースのコーホート分析』早稲田大学人間総合研究センター。
- 安藤由美, 2000『沖縄におけるライフコースの出生コーホートの比較研究』平成9.10年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書。
- エルダー, G.H., 1986, 本日時雄ほか訳『大恐慌の子どもたち—社会変動と人間発達』明石書店。
- ハレーブン, T.K., 2001. 正岡寛司監訳『家族時間と産業時間』早稲田大学出版。
- 宮坂靖子, 2009『「お産」の社会史』新編 日本のフェミニズム5 母性 岩波書店99-133。
- 長坂格, 2009『国境を越えるフィリピン村人の民族誌: トランスナショナルリズムの人類学』明石書店。
- 森岡清美・青井和夫, 1991『現代日本人のライフコース』日本学術振興会。
- 落合恵美子, 2004『21世紀家族—家族の戦後体制の見かた・超え方[第三版]』有斐閣。

- 落合恵美子, 2008『現代中国都市家族の社会的ネットワーク』首藤明和・落合恵美子・小林一穂編著『分岐する現代中国家族』明石書店: 64-110。
- 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編, 2007『アジアの家族とジェンダー』勁草書房。
- 朴京淑・山根真理, 2007『韓国女性のライフコースと仕事・家庭役割の意味』落合・山根・宮坂編『アジアの家族とジェンダー』勁草書房: 51-69。
- バーソング, T. & ベールズ, R. 1981 橋爪貞雄他訳『家族: 核家族と子どもの社会化』黎明書房。
- 鄭 楊, 2002『中国都市部の親族ネットワークと国家政策—3市における育児の実態調査から—』『家族社会学研究』14(2): 88-98。
- 山根真理, 2006b『韓国の家族・ジェンダーの『伝統』と『近代』再考』北原淳他編著『地域研究の課題と方法—アジア・アフリカ社会研究入門—実証編』文化書房博文社: 121-137。
- 山根真理, 2011『アジアの家族・ジェンダーの『伝統』と『近代』再考のためのノート—韓国高齢者のライフコース・インタビューを中心に—』『愛知教育大学研究報告』第60輯: 159-166。
- 吉村典子, 1985『お産と出会う』勁草書房。

[韓国語]

- 이종찬 (イ・ジョンチャン) 他, 2009『의학의 세계사』몸과마음. (『医学の世界史』「体と心」出版.)
- 박경숙 (パク・キョンスク), 2004『생애구술을 통해 본 노년의 자아』『한국사회학』제38집4호: 102-132. (『人生の語りを通して見た老年の自我』『韓国社会学』第38集4号.)
- 박수미 (パク・スミ), 2002『한국여성의 생애과정과 경제활동—노동시장 진입 퇴장에 관한 중단적 연구』한국전신문화연구원 박사학위논문. (『韓国女性のライフコースと経済活動—労働市場進入・退場に関する縦断的研究』韓国精神文化研究院韓国学大学院博士学位論文.)
- 송인주 (ソン・インジュ), 2010『남성 노인의 노동 생애경로와 일의 의미』가톨릭대학교 대학원 박사학위논문. (ソン・インジュ『男性老人の労働人生経路と仕事の意味』カトリック大学校大学院博士学位論文.)

[中国語]

- 周銘文, 2003『一个知识女性的心路历程』江西师范大学. (『一人の知識女性の心境の変化』.)
- 赵玲丽, 2008『李清照的人生经历与词作联系探』『长治学院学报』25卷第16期. (『李清照のライフコースと作品のかかわりについて』.)

[英語]

- Gurthie, 1966. *Child rearing and personality development in the Philippines*. Pennsylvania State University Press.
- Jocano, Felipe, 1969. *Growing Up in a Philippine Barrio*. New York: Holt, Rinehard and Winston.
- Mangay-Angara, Amansia 1981 "Philippines: The Development and Use of the National Registry of Traditional Birth Attendants." In Mangay-Maglacas, A. and H. Pizurki (eds.) *The Traditional Birth Attendant in Seven Countries: Case Studies in Utilization and Training*. Geneva: World Health Organization.
- Nydegger, W.F. and C.Nydegger. 1966. *Tarong: An Ilocos Barrio in the Philippines*. New York: John Wiley & Sons.

(2013年9月30日受理)